

今日は十二月二十八日ですから、もう四つ寝るとお正月がやってきます。童謡では凧揚げやコマ回しなどで遊べるのが楽しみだと歌いますが、詰まるところ子供にとって一番嬉しいのはお年玉を貰える事に尽きるでしょう。

果たして今の子供たちのお年玉の相場がどれほどかは想像もつきませんが、僕が小学生の頃には五百円札一枚程度だったような気がします。そんなお年玉には忘れられない思い出があります。それは小学校六年生の正月のことでした。例年父方と母方の実家へ行くのですが、集まる親戚も少なく貰えるお年玉はそれほど多くはありませんでした。ところがその年から、大人の事情によって母方の実家が変わったことにより思わぬことが起きたのです。

始めて行く母の実家には近隣の親戚たちが大勢集まっていて、大人たちは新顔の僕と弟の兄弟を見つけると、次から次へと千円のお年玉をくれるのです。あつという間に千円札は十枚を越えました。今から五十年前の一万円は、当時の小学生にとっては夢のような輝きを放っていたのです。

知らないおじさんやおばさんたちが酒盛りを

する賑わいの中、私は出されたお節を神妙な顔つきで咀嚼しながら内心幸せな気分浸っていました。思いもかけず大金を手にしたことが嬉しくて仕様がなかったのです。さつきまで感じていた身の置き所のない居心地の悪さなど吹っ飛んでいきました。

今思えば、禍福は糾える縄のごとしを地でいったような出来事でした。あの時の高揚した気分は、不思議なことに今でもつい先だつてのことのように思い出すことができるのです。欲深な私は翌年の正月も同等の収穫を期待したのですが、それほどの結果は得られませんでした。理由は推して知るべしでしょう。それでも、以前とは比べものにならない額でしたが。

さて、巨匠日野日出志先生の恐怖漫画に『元日の朝』という名作があります。昨日まであれほど賑わっていた街から、全ての人がいなくなつたように静まりかえっている元日の冷たく凛とした風情（今は昔の話ですが）を逆手に取つた不思議な物語です。今度の正月も実家に帰って、本棚に大切にしまつてあるその漫画本をこっそりと読みながら、過ぎてしまえば全て懐かしい半世紀前のお正月の思い出に浸ろうと思えます。



専業ババ奮闘記(その2) 82

木幡智恵美

ショートステイ (1)

医療ソーシャルワーカーの方からショートステイの空きがあると連絡があったのは、相談した日から三日目だった。することが速い。義姉と相談し、一週間後に紹介された二箇所の見学をすることにした。

義母は、短時間の放射線照射トリハビリ以外はベッドの上の生活で、行くと大概眠っていた。たまたま看護師長さんが病室におられた日、「車椅子で廊下を回られていいですよ」と、義母を車椅子に乗せてくださった。義母曰く、「雄ちゃんみたい」な師長さんは、息子より一回りは年上だと思われる、がっちりした体格の人だ。息子ほど背は高くないが、丸刈りの頭と黒ぶち眼鏡がそう思わせるのだろう。四階の廊下を回りながら、一年半前のことを思う。肺炎で入院した時は、結構車椅子で連れ出して、窓から見える景色を眺めては、「あそこが赤玉さん」と、毎回繰り返していた。今回はコロナ禍で、面会は十五時以降の十五分以内と限られている。ほんの気休め程度ぐると一周して病室に帰り、近くにおられた看護師さんに手伝ってもらってベッドに寝かせた。

そうして迎えた見学の日、義姉と夫と三人で、まずは一軒目のショートステイを訪ねた。小規模多機能居宅介護施設で、たまに散歩をするコース上の高台にある、一見アパート風の建物だ。サービスタク高年齢者向け住宅、ショートステイ、デイサービスの機能を有していて、この度ショートステイに空きがでたとのことだ。入り口でのコロナ問診、検温、消毒は病院と同じで、面会は、午前午後を問わず、十五分以内で可能。建物が新しいのと、スタッフがにこやかなことが気に入った。そして、何より驚いたのは風呂。車椅子ごと入り、一人入ることに湯を入れ替える仕組みになっている。清潔感があり、設備も整っている。個室は狭いといえ狭いが、日中はデイサービスの人と一緒に広いフロアで過ごすとのこと。

もう一軒は、車で十分くらいの住宅街にあり、古い木造家屋を小規模多機能に転用していた。職員さんに高齢の方が多く、風呂は家庭用で、全面介助を要する義母が入れるようなものではない。おまけに、料金の安さを売りにしているところが気に食わなかった。三人、相談するまでもなく、一軒目ということで一致した。

30代フリーター やあ、ジイさん。日経平均株価の昨年末の終値が2万8791円71銭と、バブル期の1989年末以来32年ぶりの高値となり、年明けの大発会ではさらにそれを510円08銭も上回ったと伝えられている。暮れの朝日新聞の世論調査では、岸田内閣の支持率は49%と、発足直後の45%を上回った(12月21日朝刊)。支持率が右肩上がりの政権は珍しい。分配に重点を置く岸田政権の「大きな政府」路線が市場からも、世論からも支持されているということになる。

年金生活者 もうひとつ内閣支持率を押し上げる要因となっているのがこの政権の「ゼロコロナ」政策だ。これは「大きな政府」と相性がいい。個人や企業の行動を制限し、それにとまらぬ損失を補償するため財政赤字による再分配を進めるのが「ゼロコロナ」政策だからだ。

これから先オミクロン株の感染が拡大しても、岸田内閣は前政権や前々政権ほど支持率を落とすことはないだろう。

なされているという意味で「大きな政府」の国家と言える。それが政党も国民も「大きな政府」政策に傾きやすい歴史的な要因と考えることができる。

30代 岸田政権は安倍・菅政権にくらべてそうした伝統により忠実で、それで支持率を上げ、野党からも厳しい追求を受けないで済んでいるということか。

年金 岸田政権と安倍・菅政権の大きな違いのひとつは、コロナ対策で前者が支持率を上げたのに対し、後者は支持率を下げ、最後に退陣にまで追い込まれたことだ。

「やりすぎのほうがまし」と「ゼロコロナ」路線を明確にして支持率を上げることに成功した岸田政権は、GOTOキャンペーンにこだわるなど「ウイズコロナ」に未練を見せて国民の支持を失った安倍・菅政権と対照的に言っている。

安倍・菅政権も基本は「ゼロコロナ」路線だった。「ゼロコロナ」一辺倒の医師会や病院業界――私が「医療

う。この変異株は重症化のリスクが低いというえに、岸田文雄自身が「やりすぎのほうがまし」と言う厳しめの対策が国民に安心感を与えるはずだからだ。「ゼロコロナ」を基本としながらも、「やりすぎ」に注意したために、感染拡大に連動して支持率を落とした安倍・菅政権とは異なる推移をたどる可能性が高い。

30代 「ゼロコロナ」「大きな政府」は野党第1党の立憲民主党なども同じだろう。

年金 「政策立案型」の野党への転換をはかる立憲にとつては、「立案」した「政策」がさつそく政権に受け入れられたと言えなくもない。もつとも、それは野党を勢いづかせるよりも岸田政権を安定させる方向に作用しそうだ。

もともと「大きな政府」は戦後の日本の政治の基調だった。「小さな政府」路線に傾いたのは小泉政権のときくらいだ。米英とは違うこうした「大きな政府」への偏りは、私たちの国家の特性がかかわっている。

権力」と呼んでいる医療業界の言うことを聞かなければ、コロナ対策を実行に移せないばかりか、医療への信頼が厚い国民の信用を失うおそれがあるからだ。

だが、安倍晋三も菅義偉も「ゼロコロナ」を目指すあまり個人や企業の行動制限をきつくして経済に打撃を与えることを恐れた。アベノミクスを旗印に二人三脚で長期政権を維持してきたふたりは、経済優先こそが国民の支持

30代 日本はそんなに特殊な国家なのか。

年金 吉本隆明は国家を大きく3つの類型に分けている(『中学生のための社会科学』)。第1類型の国家は「住民は無意識のうちに『国家』というものは『社会』やそこで日常生活を送っている人々をすつぽりと覆いつくしているものとみなしている」。東洋の諸国家がそれに属する。

第2類型は西欧の先進国が典型で、「『国家』といえば『政府』およびその実務機関である諸官省庁だけを指し、『社会』はその下にあつて人々が日常生活を営んでいる場所、はつきりと『国家』とは別のものであると考えられている」。

そして第3類型は「『国家』と『社会』がはつきりした境界をもたないで、総体として一つの共同体になっている」。これは未開の地域に見られる。

日本の国家は第1類型に属し、「国家」が「社会」を包み込んでいるとみ

を得る政策であることを経験上よくわかっていた。GOTOトラベルの実施に固執したのもそのためだ。

30代 岸田文雄は同じ轍を踏むことを避けたわけだ。

年金 経済をあと回しにしても「ゼロコロナ」を目指すことにした。もし緊急事態宣言を出すようなことになっても、直接ダメージを受けるのは飲食、旅行、イベントの業界などに限定され、国民の大多数は大きな影響を受けないことを織り込んでいるはずだ。

「やりすぎ」の効果にはおまけもついていた。大学入試ではオミクロン株の濃厚接触者には当日受験を認めなかったり、日本に到着する国際線の新規予約を12月末まで止めるよう航空会社に要請したり、「やりすぎ」の方針を出したあと、批判されて撤回し、「聞く力」をアピールすることもできた。

そういうわけで、普通の風邪に限りなく近いと考えられるオミクロン株に、大勢の生活が制約される毎日がこれからも続くだろう。

ニュース日記 814
中村 礼治

「大きな政府」と「ゼロコロナ」